

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：28001

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K01070

研究課題名（和文）琉球と福建を結ぶ海上ルートの考古学的研究 - 遺跡出土中国陶磁の分析を中心として -

研究課題名（英文）Archaeological Research on the Maritime Route Connecting the Ryukyus and Fujian: Focusing on the Analysis of Chinese Ceramics Excavated from Archaeological Sites

研究代表者

森 達也（MORI, TATSUYA）

沖縄県立芸術大学・美術工芸学部・教授

研究者番号：70572402

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、14世紀末から15世紀にかけての中国から琉球にいたる海上ルートを明らかにすることを目的とし、沖縄本島の首里城や久米島、西表島、石垣島、与那国島、台湾の馬祖列島、福建・東洛島沈船などでの出土中国陶磁を調査し、併せてオーハ島海底遺跡と宮古・来間島沖海底遺跡の水中調査、及び久米島の具志川グスクに隣接する田尻原遺跡の学術試掘調査を実施した。その結果、14世紀中頃以前には中国から先島を経由して沖縄本島に至っていた交易ルートが、朝貢が始まった14世紀末以降には尖閣諸島の沿岸を通過して久米島を経由して沖縄本島に至るルートに変化したことが推定されるようになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、古琉球時代の中国、琉球間の海上ルートを研究する上での、久米島の重要性を指摘することができた。14世紀中頃までは中国から先島を経由して沖縄本島に至っていた交易ルートが、冊封が始まる14世紀末頃から、尖閣諸島の沿岸を通過して久米島を経由して沖縄本島に至るルートに変化したことが推定されるようになった。久米島の考古学的研究を重視する研究方針は、現在進行中の科学研究費基盤研究A「琉球王国の海上交通路の研究 - 沈船遺跡、港湾、文献資料、絵画・地図資料の総合調査 -」（2023～27年、研究代表：森達也）に引き継がれており、今後琉球、中国間の交流史を研究する上で重要な意味を持つことは間違いない。

研究成果の概要（英文）：In this study, we aim to clarify the maritime route from China to the Ryukyus from the end of the 14th century to the 15th century, and investigate excavated Chinese ceramics at Shuri Castle, Kume Island, Iriomote Island, Ishigaki Island, Yonaguni Island, Matsu Islands in Taiwan, Fujian Dongluo Island wrecks, etc. In addition, we investigated the underwater ruins of Oha Island and the underwater ruins of Kurima Islands, and also excavated the Shirihara ruins of Kumejima. As a result, we found that the trade route from China to the main island of Okinawa via Sakishima before the middle of the 14th century changed to a route from China to the main island of Okinawa via the Senkaku Islands and Kume Island after the end of the 14th century.

研究分野：考古学

キーワード：古琉球 海上航路 貿易陶磁 朝貢貿易

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

琉球王国は14世紀末から19世紀末まで中国の明朝と清朝に朝貢し、海上の道を通じて進貢使を毎年のように派遣した。そのルートは16世紀以降については文献資料でたどることができるが、14世紀末から15世紀にかけての朝貢ルートの実態については明らかでない。この時期の朝貢航路に関する文献記録がまったく残されていないため、これまで深く論じられることがほとんどなく、16世紀以降の文献記録にあるのとほぼ同じようなルートが用いられていたであろうと漠然と考えられているに留まってきた。

### 2. 研究の目的

本研究は、14世紀末から15世紀にかけての琉球の朝貢ルートを明らかにすることを目的とし、沖縄本島の首里城を中心とした主要なグスクや那覇・渡地遺跡などの港湾遺跡から出土した該期の陶磁器と、久米島、慶良間諸島、先島諸島など朝貢ルートであった可能性がある島々から出土した陶磁器、琉球船の可能性のある福建沿海の沈船から引揚げられた陶磁器、福建の福州及び泉州の港湾遺跡から出土した陶磁器の産地組成や器種組成、質的構成を詳細に比較することによって、文献資料には残されていない朝貢ルートを推定するための考古学的な根拠を明確化しようとするものである。

### 3. 研究の方法

本研究では、まず沖縄本島の主要なグスクでの該期の出土陶磁の調査を実施し、産地組成、器種組成、階層性などの分析を行う。また、久米島や慶良間諸島、先島諸島での該期の出土陶磁を同様な方法で調査・分析する。さらに、福州や泉州など中国側の窓口となった港湾都市での該期の陶磁器の出土状況を調査・分析し、併せて福州沿海の沈船引揚げ陶磁の調査・分析を実施する。こうした陶磁データを比較しながら、最終的には朝貢ルートについての考察を行なう。

### 4. 研究成果

#### (1) 調査・研究の経過

本研究は、当初は2018年から2021年の4年間の予定であったが、新型コロナウイルス感染症(Covid-19)の影響により2020年から21年にかけてほとんどフィールド調査が実施できなかったために2年間延長して、2024年3月まで継続した。

2018年4月～2019年3月

研究初年度である平成30年度は、琉球と福建を結ぶ海上ルートの考古学的研究を具体的に進めるための基礎的資料の調査・研究から開始した。琉球と福州を結ぶ海路だけでなく、琉球王国の進貢使が福州到着後に明の都に向かったルートをも含めてフィールド調査と出土遺物の調査を実施したが、今年度の調査地点と内容は以下の通りである。

8月中旬に、故宮所蔵の琉球資料の調査、山東・明魯荒王墓出土資料の調査、江西・高安窖蔵出土陶磁資料の調査、明・中都のフィールド調査と出土遺物の調査、江蘇・太倉遺跡のフィールド調査と出土遺物の調査、福建・東洛島沈船引揚げ遺物の実測と撮影、福州宦溪窯の調査などを実施した。

12月下旬には福建省博物院(福州)において、東洛島沈船引揚げ遺物の実測・撮影(途中まで)、泉州博物館における泉州地域出土陶磁の調査、泉州東門窯のフィールド調査、晋江磁窰窯のフィールド調査と出土遺物の調査、広東省奇石窯のフィールド調査と出土遺物の調査を実施した。

平成31年3月上旬には西表、石垣、与那国島での出土中国陶磁の調査を実施した(旅費別途)。

3月末には明中都の明代瓦窯の調査、景德鎮における明・清時代の官窯磁器と民窯磁器の調査、福建省建窯の窯址フィールド調査、福州郊外の瓦窯跡調査、徳化窯のフィールド調査と出土遺物の調査を実施した。

こうした調査によって、今後の研究を進める上で重要な資料の確認および検証を行い、重要なデータが豊富に得られた。

2019年4月～2020年3月

令和元年度は、まず4月中旬に久米島出土の遺跡踏査と出土陶磁器の調査を実施した。8月には、北京故宮博物院で開催された『天下龍泉展』に出品された明代龍泉窯青磁の中で沖縄出土龍泉窯青磁と関連する資料の調査を行った。10月には久米島出土中国陶磁器の追加調査を実施し、12月中旬には与那国島、西表島、石垣島での遺跡現地調査と与那国島での学術調査の打ち合わせを行った。12月下旬には、福建省で東洛島沈船の引揚げ遺物調査(実測、写真撮影)を行い、併せて福建省内の連江窯、福清東張窯、懐安窯、宦溪窯、閩清窯、茶洋窯、建窯など沖縄と関連する窯址の現地調査を行った。引き続き、景德鎮窯と出土遺物の調査を行い、12月末には江蘇省太倉遺跡(元末明初の貿易港)出土陶磁器の調査を実施した。

また、福州沖の馬祖列島（台湾管理地）の遺跡分布調査と出土陶磁器の調査を5月上旬と9月初旬に2回実施した（台湾・中央研究院との共同調査、旅費は別途）。

令和元年度の調査研究では、当初から予定していた東洛島沈船引揚げ陶磁器の資料調査がほぼ完了し、沖縄県内の久米島、与那国島、西表島、石垣島など本研究上重要な沖縄県内の資料調査を本格化することができた。また、馬祖列島の調査では、沖縄出土陶磁器の流通ルートを研究する上での重要な資料が得られた。

2020年4月～2021年3月

令和2年度は、コロナの影響によって資料調査や現地調査がほとんど実施できなかったが、これまでの調査の成果をまとめるとともに、沖縄県久米島の宇江グスクと具志川グスクの出土資料の再調査を実施した（旅費等の経費は別途支出）。その結果、福州と那覇を結ぶ海上ルートを考える上で久米島が極めて重要な位置を占めていることが明らかとなった。

こうした内容を、令和3年2月に開催された琉球沖縄歴史学会の2月例会で、「福建・那覇間の海上ルートの考古学的研究 - 古琉球期の陶磁器分布の分析から - 」の題で報告を行なった。

2021年4月～2022年3月

令和3年度の調査研究は、昨年に引き続き新型コロナウイルス感染症（Covid-19）の流行の大きな影響を受け、4月から9月頃までは出張を伴う調査がほとんど実施できなかった。10月以降に、沖縄県内の離島には、出張が可能となったため、年度後半は特に久米島に重点を置いて調査・研究を実施した。久米島は、福建と那覇を結ぶ古琉球時代の航路上で極めて重要な位置を占めていることが、前年度までの調査・研究で確認されていたが、本年度はその実像をさらに明らかにすることに焦点を当てた。10月後半と11月初旬には、久米島に隣接する東奥武島周辺の海底に15世紀の中国陶磁が散在するオー八島海底遺跡の水中調査を実施した。調査自体は沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した海底分布調査であるが、研究代表者（森達也）は、本次科研の調査・研究の一環としてこの分布調査に参加し、遺物の大部分が15世紀初頭から前半の龍泉窯青磁で、碗が最も多く、次いで皿、盤が少量含まれ、それに少量の福建・詔武窯の白磁小皿が伴うという状況を確認した。この積み荷を運んだ船が、中国から渡来したものであるか、沖縄本島から渡来したのかについての検証が今後の課題として残っている。11月中旬には、久米島博物館と共同で具志川城の隣接地域にある田尻原遺跡の学術試掘調査を実施した。この調査地点に隣接する青名崎は具志川城築城以前にグスクが設けられたとの伝承があり、試掘を行ったが、小規模な石組遺構や焼土以外には、遺構・遺物は検出されなかった。人間の活動痕跡は僅かに認められるものの、グスクと関連する遺跡ではあるかどうかは明らかにすることができなかった。今後、この地点で試掘調査を継続するかどうか検討中である。2022年1月以降は、コロナ再流行により、出張調査は実施できなかった。なお、当初予定では本年度が最終年度であったが、コロナの影響により期間を1年延長することとした。

2022年4月～2023年3月（延長1年目）

令和4年度もコロナの影響が残り、十分な調査・研究が実施できなかったが、古琉球時代の琉球王国と中国を結ぶ海路を明らかにするために、宮古島に隣接する来間島沖海底遺跡の分布調査を7月22日から24日にかけて実施した。

本遺跡は、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成19年（2007）に実施した沖縄県の沿岸地域遺跡分布調査の際に発見され、平成29年度に出版された『沖縄県の水中遺跡・沿岸遺跡 - 沿岸地域遺跡分布調査報告書 - （沖縄県埋蔵文化財センター）』で遺跡の状況や引揚げ中国陶磁の概要が報告されている。令和4年度7月の調査では、沖縄県埋蔵文化財センターの分布調査の際には明らかにすることができなかった遺物の分布範囲を明確化し、沈船遺跡であるのかどうかの判断を行うことを目的とした。

今次調査では、海底での遺物の確認、撮影、分類と位置の記録を中心に行い、その結果、遺物の分布範囲をこれまでの調査よりも絞り込むことが可能となった。ただし、沈船であるかどうかの判断をするに至るまでの状況把握はできておらず、今後の課題とすることにしたが、現時点では沈船である可能性が高くなったと考えている。また、これまでこの地点で採集された中国陶磁は、16世紀代の所産と報告されていたが、これまで引揚げられた遺物を再調査し、併せて今回水中で確認した遺物を総合的に考えると、15世紀末まで遡る可能性が高いことが明らかとなった。

令和3年度に実施した久米島のオー八島海底遺跡の状況把握と引揚げ遺物の調査によって、オー八島海底遺跡は15世紀初頭に位置づけられることが明らかとなっている。また、令和2年度以前に遺物調査を実施した福建の東洛島沈船が14世紀後半から末、石垣島の名蔵シタダル遺跡が15世紀中葉頃であることを併せると14世紀後半から15世紀末にわたる沈船遺跡の状況と遺物の時代ごとの変遷が明らかとなった。

2023年4月～2024年3月（延長2年目）

令和5年度は、2018年以來の図版、写真、採集遺物の整理を行い、研究を総括した。なお令和5年度中に、久米島・オー八島海底遺跡の追加調査を実施する計画を進め、調査機材なども準備

備していたが、現地の条件が整わず、調査実施を断念した。

## (2) まとめ

本研究は、当初は2018年から2021年の4年間の予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により2020年から21年にかけてほとんどフィールド調査が実施できなかったために2年間延長して、2024年3月まで継続した。

新型コロナウイルス感染症流行以前の、2018年、2019年には福州沖で発見された東洛島沈船引揚げ遺物の実測・撮影などを実施したほか、台湾馬祖列島、与那国島、西表島、石垣島などでのフィールド調査を行なった。2020年から21年にはコロナの影響でフィールド調査が困難であったが、久米島の宇江グスクや具志川グスク出土陶磁器の資料調査を実施し、本研究での久米島の重要性を改めて認識した。そうした知見を基に、2021年11月には久米島の具志川グスクに隣接する田尻原遺跡の学術試掘調査を実施したが、明確な遺構、遺物は確認できなかった。また、同月に久米島に隣接する東奥武島周辺オー八島海底遺跡の分布調査(実施主体:沖縄県立埋蔵文化財センター)に、研究代表者が本研究の一環として参加し、遺物の大部分が15世紀初頭の龍泉窯青磁で、碗が最も多く、次いで皿、盤が少量含まれ、それに少量の福建・詔武窯の白磁小皿が伴うという状況を確認した。2022年7月には、宮古島に隣接する来間島沖海底遺跡の分布調査を実施し、遺物の主体が15世紀末の景德鎮窯青花磁器と龍泉窯青磁であることを確認した。

一連の調査・研究により、14世紀末の東洛島沈船、15世紀初頭のオー八島海底遺跡、15世紀中葉の石垣島・名蔵シタダル遺跡、15世紀末の来間島沖海底遺跡という14世紀末から15世紀末の沈船資料の編年や陶磁組成の変化を明らかにすることができた。また、12世紀から16世紀にわたる福州から琉球に至る海上ルートの変遷やそのルートを通じて交易された陶磁器の産地や器種組成の変化、交易内容の変化を検討するための基礎的な考察が可能となった。

その考察の内容については以下のとおりである。久米島では14世紀中頃までの遺跡ではごく少量の中国陶磁しか出土せず、先島地域より中国陶磁の出土量が圧倒的に少ないが、14世紀末に琉球が明朝に朝貢を開始したのとほぼ同時に膨大な量の中国陶磁が久米島に運ばれるようになり、首里城や今帰仁グスクの出土品に匹敵するような大型製品も出土している。こうした状況から、琉球が明朝に朝貢を開始するとほぼ同時に、それまで中国から先島を經由して沖縄本島に至っていた交易ルート(以下「南路」と呼ぶ)が、尖閣諸島の沿岸を通して久米島を經由して沖縄本島に至るルート(16世紀以降文献記録にある琉球舟や冊封船が通ったルート、以下「北路」)に変化したことが推定されるようになった。また、文献記録にある明朝から琉球への船の下賜が、この交易路の変化と関連する可能性も推定され、南路が主に使われた時代には小形船による島伝いの航行が主であったが、朝貢が開始され北路が使われる時代になると明朝から下賜された大形船によって福建を出港してほぼ無寄港で沖縄本島に至る航路が主なルートとなった可能性が高いと考えられる。また、そのルートは近世琉球に引き継がれたと推定できる。

そのほか、久米島の宇江グスクで茶入れと茶臼、大量の天目茶碗の出土が確認され、宇江グスクで14世紀末から15世紀の頃に茶礼が行われていた可能性が推定されるようになった。天目茶碗の大量出土は、首里城の二階殿地区の15世紀中頃の火災層でも確認されており、琉球・中山王の居城である首里城と久米島の宇江グスクで、儀礼の共有が行われていた可能性が高いことが明らかとなった。この事例は、前述した朝貢開始以後に、久米島の重要性が急激に増したと符合しており、15世紀前半に沖縄本島の王権と久米島の権力者とが、密接な関係を有していたことを物語っていると考えてよいだろう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 森達也	4. 巻 194号
2. 論文標題 「第320回水曜講演会 中国青花瓷器の誕生と展開 西アジアとの関係を通じて」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『出光美術館館報』	6. 最初と最後の頁 4頁、36頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森達也	4. 巻 3
2. 論文標題 元時代の陶磁器流通 - 陶磁史上のモンゴル・インパクトについて - 」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 陶磁文化研究	6. 最初と最後の頁 123/147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森達也	4. 巻 6
2. 論文標題 福建・広東地域の清朝青花瓷器 - 東溪窯を中心に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京大学埋蔵文化財調査室 研究プロジェクト6 18・19世紀の福建・広東諸窯の貿易陶磁器 資料報告集	6. 最初と最後の頁 102/112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森達也	4. 巻 10
2. 論文標題 中国から琉球 陶磁の道を探る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 なじまゝ 親しみ深きアジア	6. 最初と最後の頁 8/9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森達也	4. 巻 26
2. 論文標題 木村定三コレクションの中国陶磁	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛知県美術館研究紀要	6. 最初と最後の頁 20/68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森達也	4. 巻 2019年7月号
2. 論文標題 中国青瓷対日本陶磁的影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 紫禁城	6. 最初と最後の頁 78/99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森達也	4. 巻 第六十三冊
2. 論文標題 East-West Interaction from the Ninth to the Fifteenth Centuries as Seen from Trade Ceramics: Through a Comparison of the Persian Gulf and Ryukyu Islands	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 國際東方學者會議紀要	6. 最初と最後の頁 28 41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 森達也
2. 発表標題 「9～13世紀の日本陶器と高麗青瓷が受容した中国青瓷の影響」
3. 学会等名 國際學術シンポジウム『龍溪窯 青瓷窯址 千年製磁』韓国/主催：高麗郡庁、主管：文化遺産研究所 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森達也
2. 発表標題 「日本沖繩発現元青花」
3. 学会等名 『「求古帰元」元青花国際学術シンポジウム』主催：中国/景德鎮陶瓷学院（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tatsuya Mori
2. 発表標題 Chinese Official Type Ceramics and Vietnamese Ceramics Excavated from Shuri Castle Site, Okinawa, Japan
3. 学会等名 IMPEREAL CERAMICS in THANG LONG ROYAL PALACE/ 2021 International Symposium/ Vietnam (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森達也
2. 発表標題 日本出土の明末清初中国陶瓷
3. 学会等名 中国国家博物館主催『明清之際外銷瓷研究』学術研討会（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森達也
2. 発表標題 黒石号沈船與波斯湾中国陶瓷
3. 学会等名 上海博物館主催『唐宋時期的海上絲綢之路』国際学術研討会（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森達也
2. 発表標題 元時代の陶磁器流通 - 陶磁史上のモンゴル・インパクトについて -
3. 学会等名 国立光州博物館主催『新安沈船研究の現状と未来』（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森達也
2. 発表標題 福建・那覇間の海上ルートの考古学的研究 - 古琉球期の陶磁器分布の分析から -
3. 学会等名 琉球沖縄歴史学会 2021年2月例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森達也
2. 発表標題 沖縄考古学と関連する中国台湾の近年の調査事例
3. 学会等名 沖縄考古学会・定例研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森達也
2. 発表標題 馬祖列島與琉球王国
3. 学会等名 馬祖水下資産 文化部跨海学弁国際論壇（台湾・馬祖）（招待講演）
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 森達也
2. 発表標題 宋元明龍泉青瓷の外銷
3. 学会等名 龍泉青瓷與全球化國際學術研討會（中国・龍泉）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森達也
2. 発表標題 近年の中国・台湾における琉球と関連する考古学調査事例
3. 学会等名 首里城研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森達也
2. 発表標題 台湾と沖縄出土の貿易陶磁
3. 学会等名 東南アジア考古学会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森達也
2. 発表標題 貿易陶磁から見た9世紀から15世紀の東西交流 ペルシャ湾と琉球列島の比較を通じて
3. 学会等名 東方学会（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 森達也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 高志書院	5. 総ページ数 239
3. 書名 貿易陶磁器と東アジアの物流 平泉・博多・中国	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------